

百二十周年記念陶板画と祝典

学園理事長 小林 素文

愛知淑徳学園創立百二十周年、愛知淑徳大学開学五十周年を迎えるにあたり、記念事業の「大学開学時に建てられ老朽化が目立つ長久手キャンパス一号楼を解体し新一号楼を建設する」工事が昨年5月に完成し、新棟の外壁と内壁に周年を記念するのにふさわしい陶板画が飾られました。外壁に取り付けられたのが高さ13m幅10mの大作『蒼穹の風』。原画作者の久世直幸氏（大阪芸術大学教授）が「蒼穹とは青く晴れ渡った大空を意味します。無限の可能性に満ちた若い時間を青空に託して、希望に満ちた未来に向かって風とともに進んで欲しい、との願いを込めて制作しました。」と語る思いは、生徒たちが今も聞く『淑徳晴れ』に通じています。

今から65年前の1959年3月31日、思い出が一杯積もった池下学舎に別れを告げ、校旗を掲げた生徒を先頭に全校生徒が徒歩で真新しい星が丘学舎まで行進をいたしました。その日は雲一つない上天気。そこで生徒たちが聞いた校長先生の最初のことが「今日は淑徳晴れ」。そこには「淑徳生よ、今日のような青空に夢掲げて学校生活を送ってくれ」との願いが込められていました。



新棟の内壁には、芝康弘氏（日本美術院特待）原画の陶板画『君に読む未来』が飾られました。子どもたちの好奇心に満ちた表情が見事に描かれたこの陶板画は、芝康弘氏が原画への思いを綴った次の詩にあるように、いつの時代も変わらない学校という空間の原風景を思い起こさせてくれます。

子どもたちの好奇心に満ちた表情が見事に描かれたこの陶板画は、芝康弘氏が原画への思いを綴った次の詩にあるように、いつの時代も変わらない学校という空間の原風景を思い起こさせてくれます。

木漏れ日の中で
優しい風に吹かれながら
皆と過ごした大切な時間
でももうすぐ
思い切って遠い海を目指し
船出しよう
暗いやみも
此処を想い出せばこわくないよ
刻が経ってまた集まるとき
どんな話が聞けるのだろう

いつの時代も、未来永劫に、生徒たちが小さな頃の好奇



心を失うことなく、天の深みへ夢掲げて、光り輝いている学園であることを願って止みません。

*

6月18日に日本特殊陶業市民会館において全校生徒が集い挙行される百二十周年祝典に、名古屋フィルハーモニーともにお招きする、歌手の八神純子さんは本校の卒業生だけでなく、創立七十周年にも関わりがありました。

愛知淑徳の五十周年、六十周年の行事は、式典、プロの演奏家によるコンサート、物故者を偲び感謝する追悼会、でしたが、50年前の七十周年の折には式典と追悼会だけで、コンサートは行われませんでした。

愛知県体育館で、愛知県知事を始めとする多数の来賓を迎え挙行された式典で、小林素三郎理事長が「この度の学園七十周年に当たり、淑徳関係者の一致協力により希望の四年制大学の設立をみて、ここに中学、高校、短大、大学と一貫した総合学園となることができました。」と述べられた、七十周年の記念事業「四年制大学設立」が困難をともなう大事業であったため、コンサートは企画されなかったのです。

その代わりに、「伝統を認識しつつ、新しい学園の息吹を表そう」と「七十周年記念歌の募集」が、中高を中心に

行われ、多数の応募がありました。残念ながら一席はありませんでした。

その時、二席となった『明日に向かって』（作詩 高一

田中恵子、作曲 高一 庄司尚代）を歌ったのが当時高校二年生の八神純子さんでした。八神さんは本校在学中にヤマハの「ポピュラーソングコンテスト」に二年連続で入賞していました。きっと素晴らしい歌声で『明日に向かって』を歌われたと思いますが、二席であったため、盛大な披露をされることもなく、今に残っていないのが残念です。八神さんは本校卒業後、自ら作詞・作曲した『水色の雨』が全国を風靡するヒット曲となり、その後も数々のヒット曲を生みだし、今も現役のシンガーソングライターとして活躍しています。

卒業生の八神さん、名古屋フィルハーモニー、そして在校生が共に繰り広げる百二十周年を寿ぐ舞台が全校生徒の心に響きわたっていくことを心より祈りたいと存じます。